

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	左 曼麗
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 洪沢栄一の論語観 ―その思想の形成過程と影響を中心に―			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	佐藤 利行	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	本田 義央	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	有馬 卓也	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	李 均洋 (首都師範大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、日本の社会が大きく変動する幕末から昭和初期にかけて活躍し、「時代の児」と呼ばれた洪沢栄一（1840～1931）の論語観について、その少・青年期から実業時代、引退後、晩年期の各時期における特徴を検証し、併せて中国における洪沢の評価について論述したものである。論文は序章、第一章「『論語』と出合った少・青年時代」、第二章「仕官・実業時代の論語観―商業道德論の形成―」、第三章「引退後の論語観（1）―儒教・修養団体への参与」、第四章「引退後の論語観（2）―洪沢の孔子観」、第五章「引退後の論語観（3）―修養道德論の形成」、第六章「晩年期における論語観の集成」、第七章「洪沢の論語観の受容」、第八章「洪沢の論語観と中国」、終章の全十章から構成されている。</p> <p>序章では、研究の動機・目的を論じ、先行研究を整理・分析した上で、本研究の位置づけについてまとめている。</p> <p>第一章では、洪沢の少・青年時代を取り上げ、洪沢と『論語』との関係を考察する。洪沢の生まれた江戸後期には、儒学を中心とする教育が武家のみならず、庶民層にも浸透する。中でも経済発展に伴い台頭する富裕層の間では、漢学や武芸を学ぶ風潮が盛んであった。こうした状況下で、洪沢は父の市郎右衛門、従兄の尾高淳忠、儒学者の菊池菊城らの影響を受け、『論語』は単なる学術書ではなく、実践のための指南書であるという見方が形成される。まさに洪沢の論語観形成の萌芽期であったとする。</p> <p>第二章では、洪沢の仕官・実業時代における商業道德論形成の過程および『論語』との結びつきについて検討する。実業時代を初期（1837～1855）、中期（1886～1901）、後期（1902～1909）に分け、初期の「商業立国」「商業富国」という思考は『立会略則』完成の延長線上にあること、中期に商業教育振興のために商業道德確立の重要性を説くこと、欧米漫遊に始まる後期において洪沢が明確に『論語』に基づく商業道德論を説くようになったことを論証している。</p> <p>第三章では、実業後期以降、洪沢が孔子祭典会、陽明学会、修養団、講道館、帰一協会などの活動に積極的に参加したことについて検討する。洪沢はこうした場を借りて、井上哲次郎、星野恒、三宅雄次郎、東敬治、蓮沼門三、嘉納治五郎、姉崎正治らの知識人、哲学者との交流を図っている。</p>			

渋沢の「商業道徳」から「修養道徳」への関心の転換過程において、彼らとの接触、交流が重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。

第四章では、『実践論語処世談』の孔子に関する言説の分析を通して、渋沢の孔子観を検討する。渋沢は孔子を「平凡なる聖人」「円満なる人」と評価し、孔子を人生の指導者と見なし、孔子の教えを規矩準繩とした。その上で孔子を「進歩主義者」「啓発教育の実践者」と位置づけ、孔子の思想はいつの時代にも通用すると考えていたことを明らかにした。

第五章では、渋沢の関心が商業道徳から修養道徳へと転換した時代背景を考察し、修養に関する著書や講演集を取り上げて検討する。教育勅語の發布後、その趣旨を徹底させるための道徳教育が全国的に盛んとなる中で、渋沢の『論語』に基づく修養道徳論も広く世間に知られるようになったことを明らかにしている。

第六章では、晩年の渋沢による儒教団体斯文会への参与、斯文会を通じて完成させた『論語』に関する事業を整理した上で、同時期の渋沢の論語理解、『論語講義』の位置づけを検討する。研究者としての側面を見せる『論語講義』の編纂は、渋沢の論語観構築に不可欠なものであったとする。

第七章では、実業界における渋沢の論語観の影響、現代社会における渋沢の論語観の受容についての検討を行っている。実業者としての渋沢の評価とともに、引退後の渋沢の人格に対する評価、すなわち精神界における貢献を賞賛する言説が多くなり、その『論語』に基づく思想は後世の実業家に多大なる影響を及ぼしたことを述べる。

第八章では、近代以降の中国における渋沢の評価について論述する。近代中国では日本の経済発展の経験を参考にしようとし、渋沢を日本実業界の重要人物として扱った。1980年代以降、中国の経済発展に伴い、儒学を核心とする中国伝統文化と経済発展との関係が学界において盛んに議論されるようになる中、渋沢の思想は高く評価され、関連書籍の翻訳などが多く出版されたことを指摘する。

終章では、本研究をまとめ、今後の課題について述べる。

本論文は、渋沢栄一の論語観について、それがどのように構築されていったかを渋沢の生涯を追いながら丹念に見ていくとともに、渋沢の論語観が日本の社会、更には中国に及ぼした影響についても広く考察するものであり、渋沢研究の指針ともなるべき好論文である。今後の課題としては、渋沢の『論語』理解に関する問題、すなわち江戸時代の朱子学的理解をいかに捉えていたのか、それを具体的に示し、渋沢の『論語』解釈の特徴を明確にする必要がある。今後の更なる発展が期待される研究として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)